

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 修士課程《一般》	2026年度 秋季
専門科目		

【I】

《解答又は解答例》

受験者の知識、理解、考察、議論構築を総合的に問う論述問題であるため、一義的な解答例を示すことはできない。解答に当たっては、哲学研究のあり方と哲学史研究のあり方がそれぞれいかなるものであり、どのような根拠により相互に関係するか否かを明確に説明することが求められる。

《出題の意図》

哲学研究と哲学史研究の関係あるいは無関係を論じた解答により、受験者の哲学理解の重要部分を理解することができる。また、その解答により、受験者の研究姿勢、研究展開の可能性あるいは制限を推測することができる。結果として、他の問の回答結果と併せて合否を判定するための資料となる。

【II】

《解答又は解答例》

1) プラトンの「魂の三分説」 Plato' s three fold theory of the soul

プラトンはその著『国家』において「正義」を規定するために魂を3つに区分した。魂は「理知的部分」「気概的部分」「欲望的部分」に分けられ、それぞれの徳は順番に「知恵」「勇気」「節制」である。「理知的分」の考え・指導に「気概的部分」が協力して「欲望的部分」がそれらに従うことにより、魂全体が正義の徳を実現し正しい魂（正しい人間）が成り立つとする。この三分説は『国家』に続く『パイドロス』にも継承され、晩年に近い作品の『ティマイオス』にも認められる。

2) アウグスティヌスの自由意志とルターの奴隸的意志

アウグスティヌスは人間には神から与えられた能力として自由意志が備わっているとし、それは基本的には自らに提示されている選択肢を理解する能力だと言える。そのように選択肢を理解した上で、より善い選択肢を選べるのが善の起源となるのだから、自由意志は人間が善く生きるための能力である。しかし、そうした自由意志は人間においては原罪によって弱められており、より悪い選択肢を選ぶことで悪の起源ともなってしまう。そのため、人間は神の恩寵（つまり洗礼）を授かることで、より善い選択肢を選べるように助けてもらう必要があるとした。

他方でルターは、アウグスティヌスの考えに従いつつも、人間の意志は自由なのではなくむしろ奴隸的であり、全くもって善い選択肢を選ぶことができない、つまり悪の起源としかかなり得ない能力だとした。これは、人間は本性的に単独で善を為すことができないほどに弱い存在であるとする人間理解に基づいており、そのため我々が善い選択肢を選ぶためには、神に全てを委ねる必要があり、つまり神を信仰することによってのみ、我々は善く生きるのだと考えた。

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻	2026年度
専門科目	修士課程《一般》	秋季

3) 神または自然 *Deus seu natura*

スピノザに典型的に見られる、神と自然を同一視する思想。世界(自然)には一つの実体(神)しかなく、その他すべてのものは実体の様態の現れとスピノザは考える。しかしながら神と自然の事物は完全に同じものではないので、スピノザは産み出す自然(能産的自然)としての神と産み出された自然(所産的自然)とを区別するが、両者は断絶したものではなく、表裏一体の連続性をもつ。したがって世界には外部や超越的存在者といったものはなく、世界こそが神の直接的かつ連続的な現れであり、神は世界すなわち自然に内在する、万物の第一原因であり、かつ自身の原因(自己原因)でもあるとスピノザは考える。

4) 人間性の尊厳 *Würde der Menschheit*

人間性の尊厳は、終末期医療においても尊重されるべき人間の価値であると考えられる。カントの道徳思想において、「人格のうちなる人間性」はたんに手段として扱われてはならず、目的としても扱われねばならない、とされる。目的として扱われる人間性は、意志の自律による道徳的な心の働き(良心)において示される。このような人間性は、物件が価格としての価値しか持たないのに対して、尊厳としての価値を持つと考えられる。

5) 『キリスト教の本質』 *Das Wesen des Christentums*

L・フォイエルバッハが、キリスト教等の宗教の批判的分析を通して、人間学としての新しい哲学を基礎づけようとした著作。本書によれば、キリスト教をはじめとした宗教における神の諸規定は、悟性・意志・心情といった人間の類的本質が疎外され対象化されたものであり、神の意識は実のところ人間の自己意識である。それゆえ宗教においては、一方では現実世界から意味を奪ってしまう非人間的側面が退けられねばならないが、他方では道徳的規範のような人間的側面が読み取られるのだとされる。このような観点からフォイエルバッハは、神学を解体し、人間学として哲学を新たに基礎づけることを志向する。

6) 本来性と非本来性 *Eigentlichkeit und Uneigentlichkeit*

ハイデガーの『存在と時間』における現存在の分析において、現存在のあり方の二つの根本的な可能性と呼ばれるもの。現存在は、自分のあり方のさまざまな可能性へと開かれているという特徴をもつ。そのさい、現存在は、自分に固有な可能性を選び取ろうとするなら本来性というあり方をし、世人と呼ばれる、世間の人々の平均的なふるまいに同化しようとするなら非本来性というあり方をすることになる。本来性はより詳しくは先駆的決意性として分析され、それに即して現存在のあり方全般を可能にするものとして時間性が取り出される。

7) 検証主義 *verificationism*

強い意味の検証主義は、文の意味内容とその検証条件と同一視する立場、弱い意味の検証主義は、文の有意味性の基準を検証条件の有無で判定する立場である。有意味な語から正当な手

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 修士課程《一般》	2026年度 秋季
専門科目		

続きで構成された文法的に適格な文であっても、「実際に何が観察されればそれが検証され、何が観察されればそれが反証されるか」という「検証条件」を持たない文が存在する。検証主義者は、それらの文は一見して有意味に思えるとしても実際には無意味であり、それについて真偽を問うことは端的に無益だと考える。検証主義者はこうした考え方に基づいて、種々の哲学的・宗教的命題を無意味なものとして退け、伝統的形而上学の間や議論に対して極めて批判的な立場を採る傾向がある。

8) 推件式 sequent, Sequenz

推件式とは、一般化された論証の形式的表現となる文字列であり、先頭から、前件とよばれる部分、区切り記号、後件とよばれる部分からなる。ここで、前件と後件はそれぞれ0個を含む任意有限個の論理式の列である

9) 市民的不服従 civil disobedience

良心や正義といった高次の価値観に照らして、国家や政府の方針や政策がまちがっていると確信した場合には、あえて法に違反する行動をとって政府に抗議することが正当化されるという考え方。19世紀半ばにアメリカの哲学者 H.D.ソローが、アメリカ・メキシコ戦争や奴隷制拡大に反対するために人頭税の支払いを拒否した際に理論化した。その思想は世界各地に広まり、ガンディーのインド独立運動などに影響を及ぼすと共に、20世紀半ばにはアメリカでの黒人の地位向上を目指す公民権運動を支える思想になった。

《出題の意図》

哲学の重要事項に関する基本的な理解がどの程度あるか、基礎的な用語・概念の説明力がどの程度あるかを問うものである。